

最終子育て究極機関 カルデア

陰炎

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

人理保証機関カルデアという場所に1人の青年「丸藤立香」が穴埋め要因として加入し、レイシフトした際に自分と、「マッシュ・キリエライト」、「オルガマリー・アニメスフィア」しか残っていない、事故が発生。

その流れで召喚システムを起動させて英霊を召喚する。

が、その召喚の際、本来出るはずのない「アルターエゴ/パッションリップ」がさらに幼体の状態で召喚される。

人理を守るために人理保証機関カルデアは「リップの子育て」を優先し、「人理保証機関 カルデア」改め「最終子育て究極機関 カルデア」は奮闘する――！

あ、藤丸じゃなくて丸藤なのは間違えたけどアナザー立香みたいな感じでなんかよかったから私は謝らない

# 目次

立香と子育てとカルデア

第1話	プロローグ	1
第2話	「ベビーカー」	7
第3話	「アーチャー奮闘の巻」	14



つてセントグラフに書いてある!!

「すごい…！こんなにいっぱいサーヴァントが！」

マシユは結構新鮮味があるような反応をしていたし、

「あなた…意外とやるじゃない」

と所長はなんかよくわからんけど関心していた。

だが、1つ問題があった。

「…あれ？あと1枚、間違いなくセントグラフなのにサーヴァント出てこないんだけど」

「なによそれは、見せなさい」

オルガマリー所長にそのセントグラフを（強引に）取られてしまったのだが…

「…なによこれ!!こんなの見た事ないわ!!」

オルガマリー所長さえもなぜか豪速球で投げ出したその「セントグラフ」は、なんかピエロみたいなのが鏡写しに写っており、トランプのジョーカーを思い浮べた。

投げ出した勢いでサーヴァントが飛び出てくる。

「…ばぶう!?!」

勢いよく出てきたサーヴァントは…子供? いや…赤ちゃん!?

「え、まって!?赤ちゃん!!」

と、咄嗟に飛び出た子を抱える。が、

「重っっ!!?!」

明らかに赤ちゃんの重量ではない。俺ぐらいあるぞこれ。

「赤ちゃん…ですか?」

「ほんとに何よこれは!?!」

マシユも所長も困惑する。

セントグラフを確認すると…

「えっと…アルターエゴ、パッションリップ…」

セントグラフのイラストでは胸が大きく、大きな爪に座っているけなげそうな少女のイラストだ。なのだが…

「明らかに出てくる姿違うくない??？」

「見た目は間違いなく2歳ぐらいだ。」

「謎ですね」

「とマッシュと話していた時に…」

「BB~~~~~チャンネル~~~~~!」

「!!?」

急に立派な視覚妨害が始まった。

「皆さんこんにちは！皆の小悪魔系後輩のBBです♡」

今回は、なんとこの人に私のかわいいかわいいリップちゃんを育てて貰おうと思いまーす!!!」

…いま、なんて？

「だーかーら、今日はセンパイに私の子供であるリップちゃんを育てていただくんですよー!!」

なんで聞こえてるんだよ!!!!!!

それより、子育てって？

「ああ。それってハネク○ボー?…じゃなくてですね」

ネタには乗ってくれるのか。

「今回は実験的にリップの霊基を私の要らない感情と女神三人を切り貼りした直後の状態にしています。なので、リップは言葉とかあまりよく分かりませんし、危ないスキルは発動どころか習得さえしていません」

…え?それ戦えないんじゃない?

「ええ。だからポケ○ンやデ○モン育てるみたいに立派に子育てしてくださいね♡リップは差し上げますから♡」

と言って視覚妨害は終了した。

「ええ…」

「子育て、ですか…」

「なんでこんなことになるのよ…」

「どうやらマッシュや所長もこの妨害を見ていたようだ。」

「…ぼぶぶ?」

めっちゃキラキラした眼で見つめてくる…



そして急いで部屋に入ってきたマシユは

「先輩!! いっぱい子供用品持ってきましたよ!!!」という。

中には幼児用の玩具やベビーカー、その他様々。

「なんでこんなに用意がいんだよ!？」

「なんか、ダ・ヴィンチちゃんか」「こんなこともあるうかとくくく！  
てつてれくくく」とかなんとか言つて用意してくれました!!!」

雑ウ!!? ド○えもんみたいなノリで用意してる!!?

なんでそんな短時間で用意できんだよ!!!?

「レオナルド・ダ・ヴィンチ」つて凄いなあ!!!?

「とりあえず、私たちは今全力でリップさんを子育てすべきです!!!」

ともはやマシユは振り切りすぎている。

序盤のチュートリアルの時の冷たい機械みたいな感じの雰囲気どこいった。

「———今、人理を守る子育てが始まる（キリッ）」

とかマシユがキメ顔で言っている。

「…まあとにかくこの子育てない限りは始まらなさそうね。私もできるとはしたげるから、頑張りなさい」

所長は諦めている。

「ええ…まあ、はい。なんかよくわかんないけど、頑張ります…」

俺も観念した。

今、人理を守るために1人のマスター（とその他大勢）が子育てを始める

冬木 聖杯前

聖杯の前に黒い騎士王は1人、剣を地面に突き刺し立っていた。



(∴あれ∴これ誰も来ないんじや)

つづく

## 第2話 「ベビーカー」

最終子育て究極機関カルデア、前回の3つの出来事！

1つ！冬木のレイシフトに失敗し、現地には3人しか居なくなつた

！

2つ！BBが無責任に自分の子供を押し付けた！

そして3つ！ヘラクレスはリップ（2歳児）お守りに全力を賭けた

!!!

「はい、ちよつとした離乳食持ってきたよ。」

ブーティカさんがリップ（2歳児）でも食べられる様なスープ状のものを作ってきた。

「ほらく、おたべ」

ブーティカさんはスプーンでスープをすくい、リップ（2歳児）の口へ持つていく。

「もぐもぐ……キヤツキヤツ」

どうやら美味しいらしい。よかつたよかつた。

「ブーティカさんは料理得意なんですね」

「まあね。これぐらいはやらないと。」

「それでも凄いです！私は料理した事ないですから」

マシユはあんまり家事はやったことない様子だった。

「さて。ブーティカ、ご主人、マシユ。」

タマキヤがリップ（2歳児）になんかやってる事に気づいた。

「…リップのやつ、お皿掴んで一気飲みしているゾ？」

…  
え？







やっぱり2歳児の重量ではない。

「先輩、ベビーカーに乗せるの頑張れ〜！ぷおお〜〜ぷおお〜〜  
〜そいやっ〜！」

「パパマスター頑張つて〜！」

外野（マシユとブーティカさん）がうるさいが重いながらもリッ  
プ（2歳児）をとりあえず抱きかかえた。  
すると…

「…まちゆたー… むぎゆ〜〜〜」

「うん!!？」

待っていきなり「まちゆたー」って!!?

しゃべったああああああああ

「待ってリップ!!むぎゆ〜〜つてされたら動けないよ!!？」

「むぎゆ〜〜〜〜」

なんか頑なにぎゅって抱きしめてくる。

めっちゃ重いけどくっそ可愛い。

「わ〜マスター似合うねえ?」

めっちゃや皮肉られてる気がする

ブーティカさんやめてくれ本当にそっち系に行ってしまう

「と、とりあえずほら、ベビーカーにのろう!」

「ふう〜」

乗せやすい様な体勢を取り、なんとかむぎゆ〜から解放され無事、  
リップ（2歳児）を乗せることができた。

…が

／バキツゴキツグシャツ!!!／

「?!」

／ドガツ!!バキツ!!!／

凄い様式美みたいに足が折れて最終的にはシートもやられていた。

「…ほげ〜」

「「……………」」

…しばらく俺が、「丸藤立香」がリップ（2歳児）を抱えます。  
~~~~~

次回予告

やめて!!パッションリップの特殊重量（不明）によつて  
ベビーカーが潰れすぎたら

丸藤の精神まで（抱える際にむぎゅーってされる度に）萌え尽き  
ちやう!

お願い、死なないでアーチャー!!

あんたが居なかったら、リップのベビーカーはどうするの!!!

魔力は残ってる!これに耐えれば、カルデアは勝てるんだから!!

次回!

『エミヤ、死す。』

トレーススタンバイ!!!

~~~~~

冬木聖杯前

まだかまだかと黒い聖剣を地面に突き刺し、（まだ）立っていた黒い  
騎士王はこう思った。

(……………)

(…………… お腹空いた)

へんじ



### 第3話 「アーチャー奮闘の巻」

俺は丸藤立香!!

18歳(多分)の時にカルデアに島流しにされ、

「待つて貴方さりげなくカルデアを島流し先として見てるの!? di  
sってんじゃないわよ!?」

カルデアのマスターになった!!

俺が育児を始めた時間(＝マスター歴)は 1日!!!

「貴方意地でもそれ引つ張るつもりでしょう!?」

少し時間が経ち、リップ(2歳児)はすやすやと疲れて寝たのでしばらくゆっくりしていた。

「あ、2人とも目が覚めた。」

エミヤとタマキヤが目を覚ました。いきなり殴られたから気を失っていたとかなんとか

「…痛い目にあつたぞ… マスター… ぐふっ」

未だにさっきの鉄塊が顔面に当たつたのが痛むエミヤ。

「まだ頭がクラクラするのだナ…」

さすがに気を失つてすぐだったので、キャットはまだ頭が痛いらしい。

「… いやー、これはやられたね。まさかベビーカーが潰れるとはねえ…」

ブーティカさんも予想外すぎて困惑している。

そりゃあ、脆いとかはあつたかもしれないけど明らかに脆いとかじゃ済まされないぐらいにすぐ潰れたから誰だつてびっくりする。

「何か対策が必要ですね…。」

マシユが顎に手を添え考え込む。

…だが、1人このタイミングで名乗り出た英霊がいた。

「状況は理解した。ここは私に任せてもらおう！私に策がある！」

そう、赤のアーチャー「エミヤ」だ。

「えー？ほんとでござるかあ？」

「先輩、エミヤさんには「投影魔術」と呼ばれる力がありまして、色々なものを構造さえ把握できていれば、なんでも複製できるのです」

…え？なにそれ!?チートじゃん!!!?

「なにそれ!!?マスター歴(＝育児歴)1日の俺からしたらチート以外何者でもないぞ!!?じゃあ仮○ラ○ダーのベルトとか…。」

「無論、可能だ。」

エミヤが実践で仮○ラ○ダーのベルトをその場に出して見せた。

出てきたのはオンドウルで、トランプ的なやつだ。

「すげえ！トランプ入るやつだ!!これならいける！やつちやつてエミえもん!!早くリップが乗れる様なベビーカーを出してよー!!」

「まあまあ焦るな…よし、生成する。」

エミヤはぽぽんとベビーカーを生成してみせた。

「これなら多分いけるだろう。」

「うおすつげえ！ありがとうエミヤ!!」

「なに、これぐらいお安い御用さ。」

エミヤは得意げにしていた。

「…さて、先輩！リップさん(2歳児)を乗せましょう！」

マシユはエミヤがこの投影魔術で出したベビーカーの強度が気になるらしい。

「まあまあマシユ、すぐ乗せるから、待ってね。」

ほら、リップ。抱えるからね。あ、やっぱり重い」

「まちゆたー…むぎゆー…」

リップはいつの間にか起きており、やっぱり抱えるとどうしてもこの2歳児は抱きしめてくる。可愛い。





「キヤツキヤツ」

「ヘラクレスさん…この楽器はどっから出てきてるんでしょうか…」

マシユも困惑しているが、

何故かタンバリンを持つていたヘラクレスがリップ（2歳児）をお守りするのが1番無難だった。

さらに…

「そーれリップくお主が好きな肉球だぞくく」

（ムニムニムニムニムニ）

「キヤツキヤツむにむにく」

キヤツトは肉球をリップのほっぺに当ててむにむにしていた。普通に楽しそうだ。

だが、今1番（精神的に）厳しいのは…

「なぜ私はこんなに運がないのかね…うっ…このっ…」

「あーんたが悪いわけじゃないよ、気にしなさんな」

明らかに落ち込み具合が半端じゃないエミヤと、それを慰めているブーティカさんがいた。

「あれはもうしばらく立ち直れないだろうな…」

そう察した直後に、

＼ウオーンウオーン／

「!?」

「これは…アラート?」

マシユが冷静にアラートだと言っている。

ついでに通信が入ってきた。

通信にはDr. ロマンと、所長が顔を出していた

「立香くん！マシユ！カルデア内に侵入者だ!!!」

「

「魔力反応も存在するわ、間違いなくサーヴァントよ！なぜエネミーサーヴァントがいるのかは分からないけど早く臨戦体勢を取りなさい！」

…サーヴァント!?なんで!?

「先輩、とりあえず戦う準備をしましょう！」

「う、うん！」

初めての戦闘なんだけど、大丈夫なのかこれ…

~~~~~

・

・

・

「人理継続保証機関 カルデア」と呼ばれる場所の、心臓とも言える場所。

「地球環境モデル カルデアス」の前。

そこには、サーヴァントがひとり、立っていた。

黒いマントに青紫の長い髪。髪に結ばれた青いリボン。

そして何より刺々しいにも関わらず美しさも兼ね備えた「美脚」とも呼べる鋼鉄の脚。

「さて、リップのやつは何処に居るのかしら。」

つづく